

東アジア共通国際語の研究：序説

沈 国 威

要旨：大航海時代以降、西洋の学問が東洋に伝来した。東洋では漢字を用いて西洋の近代的な知識体系を受け入れた。その際、語彙体系に「哲学、政府、思考、調査、正確、優秀」など数千の新語が加わった。本稿ではこれらの語を「東アジア共通国際語」と仮称する。東アジア共通国際語は二字複合語が基本的な形態であり、中国、日本、韓国、ベトナムは言語が異なるものの、語形は同じ（韓国語とベトナム語は漢音語である。但し以下は「字音語」とする）で、英語に対して共通の訳語を有している。東アジア共通国際語は、学術用語だけでなく、一般名詞、動詞、形容詞も含んでおり、現代社会において創造的な生産活動に欠かさない語彙である。本稿は、中日韓越の四言語における東アジア共通国際語の「同形・同音・同意・同訳」という特徴に焦点を当て、その「定量、定性、語源、類義分析」の四側面から研究する方法について考えてみようとするものである。このような考察により、グローバルな知識の獲得と伝播における音節言語の所記文字としての漢字が持つ、東アジアの概念共同体を維持し、発展させ続ける可能性について考える上で、有益な示唆が得られるであろう。

キーワード：近代新語 訳語 二字語化 学習語彙

○問題提起

東アジアでは有史以来、頻繁な人的往来と書物の伝播により、漢籍を核とする学問体系が形成された。即ち漢学である。漢学は、漢文と漢字によって成立しており、その概念の多くは漢字語によって表出されている。これらの漢字語は大陸文明の伝達媒体として、日本語、韓国語、ベトナム語などの諸言語と融合し、不可分の語彙的要素となった¹⁾。このような歴史的経緯により、大航海時代以降、西洋の学問が東洋に伝来した際、漢字はおのずから西洋の近代的知識体系を受け入れるための唯一の媒介となった。この過程で、「神経、哲学、政府、教室、思考、調査、正確、優秀」など、数千もの二字語が新たに用意された²⁾。これには学術用語や抽象語彙だけでなく、一般名詞、動詞、形容詞も多数含まれており、新語もあれば、意味や使用頻度に変化し、新たな命を得た旧語もある。これらの語は一方で、現代社会におけるすべての生産活動に不可欠な語彙的資源であり、他方で、東アジアが西洋の近代的概念を受け入れ、科学叙述を成立させるための共通の語彙基盤となっている³⁾。本稿では、このような語を「東アジア共通国際語」と仮称する。王力はかつて次のように指摘している。

現代中国語の新語が大量に増加した。それによって中国語の語彙が非常に豊富になり、完璧な境地に達した。豊富というのは、新語が大量に造出されたことにより、どんなに複雑で深遠な思想も中国語で表現できるようになったということである。完璧な境地に達したとは、語彙は国際化が図られ、どの新語も国際的に共通の定義を得たことである。そのため、語の意味するところはいつまでも明確で厳密であり、(形式と内容の結びつきが)非常に強固なものとなったのである。⁴⁾

本稿における「国際語」という命名も、王力から得た示唆によるものである。近代以降、どの国の言語も社会の発展を図るためには西洋の近代的知識体系と関連付けられなければならない、その語彙体系に、王力が指摘したような「国際的に共通の定義」を持つ語彙が必然的に必要となってくる。そうでなければ、外部世界との効果的なコミュニケーションが不可能である。但し東アジアの特異性は、中日韓越の諸言語は、言語類型学上の壁を超え、共通の漢字語を共有している点にある。言うまでもなく、現在韓国語とベトナム語は基本的に漢字を使用していないが、漢字語に由来する大量の字音語が存在する。したがって、東アジアにおいて互いに相手の言語を外国語学習の対象にする際、必ず「同形語」の問題に直面する。同形語は東アジアの外国語語彙教育において関心度の高い話題であるが、多くの論者や市販の同形語辞典では語義の「異」に注目するものがほとんどである。この視点からの研究は非常に重要ではあるが、「同」の部分の重要性を見落とす虞もある。外国語教育だけでなく、東アジアの近代化という歴史的背景の下でこの問題を検討する必要がある。これが、本稿が同形語の主要な部分を「東アジア共通国際語」として再定義し、東アジアの近代知識体系の構築という、地域研究の視点から検討しようとする所以である。

1. 東アジア共通国際語及びその研究

東アジア共通国際語という命名は「東アジア」「共通」「国際」という3つのキーコンセプトを含む。「東アジア」とは地理的・歴史的な空間であり、また「漢字文化圏」という名称が示すように、広域の知識文化共同体である。この共同体は共通の漢文典籍とそれによって形成された東アジアの学問・価値体系を有している。この知識体系への帰属感は、「西学中源」「和魂洋才」という言表により、近代以降の漢学と科学という東西の対峙を映し出している。

「共通」とは、東アジア域内での書面言語(閲読と筆談)による交流の可能性を指す。歴史的に、漢文は東アジアにおいて唯一の学問言語であり、日本、韓国、ベトナムでは社会的な二言語併用制度(diglossia)を形成した。近代以降、西洋の近代的知識が東洋に伝来し、近代国家が形成されるのに従い、国語の構築が喫緊の課題となった。しかし、漢文排斥、漢字廃止の主張がそれまでになく強まったにも関わらず、東アジアは結局漢字と漢文のリソースによって、

西洋の近代的知識を受け入れざるを得なかった。19世紀末に日本の「膨張」に伴い、日本国語学界の一部が「普通語」の制定と東アジア域内での普及を唱えはじめた⁵⁾。この動きは本質的には日本語を東アジアの他の言語に取って代わらせようとするものであった。それに対して東アジア共通国際語は近代知識体系を共有する語彙の基盤であり、「東アジア共栄圏」を目指す「普通語」とは理念も方向性も根本的に異なる。

「共通」が東アジア域内の相互理解を意味するのに対し、「国際」は近代的概念をめぐる東西の対応関係の確立を指す。西洋言語に対する共通の訳語の存在により、東アジアは概念・語彙の共同体となり、東アジア四言語間の相互翻訳（相互理解）の可能性が生まれたのである。東アジアにはかつて儒学、漢方医、本草、漢詩文などを論ずる共通の語彙があったが、近代に至ってまた西洋の近代的知識体系を受け入れるための語彙、即ち東アジア共通国際語を獲得した。これは言語の現代化、ないし新しい教育制度を可能にする語彙的基盤である。近代知を得ることができるという性質により、東アジア共通国際語は「学習語彙」(academic word) との高い一致度が見られる。これは東アジア共通国際語の最も重要な語彙の特徴である。では、学習語彙とは何か？ カナダの言語教育専門家ジム・カミンズ氏は、言語能力を基本的人間関係におけるコミュニケーションスキル（Basic Interpersonal Communicative Skills、略してBICS）と認知的学習言語能力（Cognitive Academic Language Proficiency、略してCALP）に分けた。生活言語能力は日常生活で必要とされる基本的な対人コミュニケーション能力を指している。一方、学習言語能力は学校で教科学習に必要な言語能力を指し、言語面での認知的学習能力の強弱を反映する。具体的には、教科学習に必要な「読む、書く」といった文章力を主とした言語能力を指している。このような区分を行う理由は、カミンズによれば生活言語能力（BICS）は2年で習得可能であるが、学校教育において必要とされる学習言語能力（CALP）の習得には少なくとも5～7年を要するためである⁶⁾。生活言語能力は、母語であれ、第二言語であれ、個人差がそれほど大きくない。しかし、学習言語能力には大差が生じやすい。その差は読解能力、作文能力、発表能力、応用能力などの面において顕著に現れる。

BICSとCALP能力の獲得が、語彙の質と量と密接に関連していることは想像に難くない。つまり異なる言語活動には異なる語彙能力が必要である。19世紀の思想家スペンサーは、「文明人は（中略）約六万あるいはそれ以上の異なった単語を持ち、それだけの数の異なった対象、性質、行為を表わす言語が生ずるに至るのである」と述べている⁷⁾。スペンサーは6万語と主張する根拠を特に提示していないが、一般的な国語辞典の収録状況を考えあわせれば、6万語は一般的な言語使用者の語彙量の限界と見ることができよう。これらの語は使用目的により、(1)生活語彙、(2)学習語彙、(3)文化語彙の3つに分けることができる。生活語彙は特定の言語社会での生活に不可欠な語彙で、学習語彙は教育と密接に関連しており、文化語彙は様々な趣味や自己向上のために必要な語彙である。近代知識の受容と継承という面においては、学習語彙が最も重要であり、義務教育における言語教育の中心的な内容であると同時に、中上級の

外国語学習の主要な目標でもある。

生活語彙は特定の言語社会での生活に必要なもので、自然に習得され、語彙量は数千を大きく超えることはないであろう（母語話者の基本的なコミュニケーション能力の均衡性を反映する）。学習語彙の獲得は義務教育およびそれ以降の学習経験に関連し、意識的に学ぶ対象である。子供たちは小学校高学年以降に学習語彙に触れ始め、最終的には数万に及ぶ語彙量に達すると思われる（学習環境によって異なる）。学習語彙は語彙力の全体に深く関わり、教科、さらには現代の科学知識を学ぶ上で不可欠である。帰国子女たちは、学習語彙が不足しているため、母国に戻った後、学習上の困難に直面することがよくある。英語教育分野における学習語彙に関する研究としては、Averil CoxheadのAcademic Word List（以下、AWLと略）が広く知られている⁸⁾。Coxheadは、英語で最も使用頻度の高い2000語（Michael West's General Service List (GSL)）の他に、芸術、商業、法律、自然科学などの分野から、100回以上または4つの分野で共通して使用される10回以上の単語を選び、AWLを作成した。570語からなるAWLは、学校教育で一般的に使用される語彙であり、GSL 2000語は文章内容の約80%をカバーできるが、AWLはさらに10%のカバー率を増加させ、さまざまな学科の内容を含む文章の読解問題を解決することができる。一方、東アジア四言語の学習語彙に関しては、管見の限り突っ込んだ議論がまだ行われていないようである。

東アジア共通国際語を形式と内容の特徴から定義すれば、基本的に次の2つの側面がある。一、東アジア共通国際語は二字漢語を中心に構成されている。例えば日本語では、その語彙は固有語と漢字語に分類され、前者は「和語」で、後者は「漢語」であるが、東アジア共通国際語の主体をなすのが漢語である。二、東アジア共通国際語は主に近代新知識の受容を目的とし、科学叙述の文脈で使用されることがその最も顕著な意味の特徴である。科学叙述の成立には、厳密な定義を持つ学術用語と、叙述を成立させる動詞や形容詞が必要である。

東アジア共通国際語の研究意義については、筆者は以下の3点を挙げる可以考虑している。

(1) 東アジア共通国際語は、日本、韓国、ベトナムの諸言語をカバーし、東アジア文化的共同体を形成するための語彙的基盤である。その研究は、国家、言語、専門分野の垣根を超え、東アジア全体の視点から、学際的、多言語的な方法で近代的知識の共有における東アジア共通国際語の基本的な役割を探究するもので、理論的意義が大きい。

(2) 東アジア共通国際語を総合的に整理し、その語数と語源を解明することによって、東アジアの科学叙述の成立や学習語彙の現状をより深く理解することができる。また漢字の将来性を再評価する上でも意義深い。

(3) 東アジア共通国際語の発生に関する研究成果は、東アジア諸言語の語彙史、近代概念史、思想史等に基礎的な情報を提供することができる。同国際語の類義分析の成果は、東アジア四言語間の外国語教育に活用され、学習効率を高めることに寄与するだけでなく、各言語の母語

としての言語教育にも有益なリソースを提供することができるであろう。

2. 「共通」の特徴について

東アジア共通国際語の顕著な特徴である「共通」には、同形、同音、同義、同訳の四つの側面がある。「同形」とは、文字の形が一致することである。古くから中国の字書、韻書が東アジアに伝わり、漢字の音形義の知識を広めた。18世紀初頭に刊行された『康熙字典』（1716年）は、4万字以上の漢字を収録し、その明朝体の字形は、長きにわたって標準形とされた。ロバート・モリソン（Robert Morrison）は、初めての英華・華英字典を編纂、出版した際、内容面のみならず、字形も全面的に『康熙字典』に準拠し、その後の英華字典の編纂と活字制作に範を垂れた⁹⁾。このように東アジアにおける近代印刷技術の確立過程において、字形統一の面で『康熙字典』が果たした役割は非常に大きい。中国語、日本語、韓国語はその後の言語近代化の過程で、『康熙字典』の字形を基本としながらも、独自に字形に変更を加えたので、『康熙字典』と一定の距離を生じるようになった。中では中国の簡体字と日本の新字体の変更が最も大きい。字形上の相違が東アジア共通国際語の識別に障害をもたらすか否かについては、さらなる実証的な分析が必要である。同時に、単一漢字の同形と合成語の同形は次元の異なる問題であり、前者の判定は『康熙字典』を基準にすれば良いが、後者の判定基準は何か？ この問題は次章で論じることとする。

「同音」とは、発音の近似性を指しているが、これは漢字の字形よりも歴史的な問題である。同音は必ずしも互いに聞き取りが可能であることを意味しない。日本語、韓国語、ベトナム語の字音は、ある歴史的時期の漢字発音の模倣に過ぎない。同音に言及するのは、日、韓、越の字音に現在の中国語の漢字発音との聞き取り可能な類似性が存在するからではなく、各言語内において字音が一定の規則性を持ち、学習者が新語を理解し、語彙量を拡大するのに役立つからである。漢字音は日本語、韓国語、ベトナム語の母語話者にとっては非ネイティブの言語音であり、長い歴史を経てそれぞれの言語に融合されたものの、「聴覚映像」（意味を持つ言語音）としては不完全なものである。日本語では、「肉、駅、菊、本」など、意味をはっきりと喚起できる単漢字の語は200以下に限られており、多くの単漢字は文脈上の支えが必要であるか、二文字以上の単位に組み合わされて初めて自由に使える語となる¹⁰⁾。同様に、韓国語、ベトナム語では漢字を使用しないため、意味と字形が切り離され、音声だけで「聴覚映像」を形成し、字義を理解することができるか否かは、理論面と実践面からさらなる分析が必要である。

「同義」とは、大部分の東アジア共通国際語、例えば「哲学、教室、優秀、思考」などが、内包と外延において、東アジア四言語の間で高度の一致性を有していることを指す。前述の学習語彙ではその傾向が特に顕著である。しかし、完全な「同義」は初期の場合に限られることが多く、その後の使用過程で概念義が保持されながら、評価、文体、コロケーションなどの面に

において、個別言語特有の変容が生じることが避けられない。意味用法の変容は認知作用による自然発生的なものであれば、例えば後述の「教室」のように理解上の実質的な障害にはならないが、他の言語使用者にとって理解不能や誤解誘因となる語もある。コミュニケーションにマイナスの影響を与える差異を記述し、誤用を避けるための情報を提示することは、後述する類義分析の主な任務である。

「同訳」とは、東アジア共通国際語が英語をはじめとする西洋言語と固定的な対訳関係を持っていることを意味する。つまり、東アジア四言語では英語等に対し、東アジア共通国際語によって共通の訳語が提供されることである。近代翻訳語の創出は、19世紀の英華字典から始まり、英和辞典の体系的な完成を経て、中国、韓国、ベトナムの外国語辞典にフィードバックされた。この歴史は東アジア各国の近代翻訳史と連動しており、重要な研究課題である。

3. 東アジア共通国際語の研究内容

東アジア共通国際語に対する通時的および共時的な考察は、定量、定性、語源、類義分析という4つの角度から行うことができる。以下に、それぞれの範囲と研究方法について簡潔に述べる。

3.1 定量研究：「同形語」の確認

定量とは、東アジア共通国際語に対し、数量的に全容を把握することである。上述した通り、東アジア共通国際語は、形態上二字以上の複合語であり、科学叙述に用いるという意味上の特徴を有するため、一字語は本稿の考察範囲外である。同形語は必ずしも東アジア共通国際語であるとは限らないが、東アジア共通国際語において、同形であることはもっとも重要な特徴であると考えている¹¹⁾。そこで、まずいわゆる同形について定義を行わなければならない。施建軍は彼の著作で、中日同形語に詳細な分析を加えた。彼は、これまでの研究を総括した上で、同形語を「標準的な中日同形語」と「広義の中日同形語」に分け、以下の10項目について検討している¹²⁾。

一、標準的な中日同形語

- (1) 簡体字と中日同形語の相違：例えば、汉语 (CN = 中国語)/漢語 (JP = 日本語、以下同)；文艺 (CN)/文芸 (JP)
- (2) 日本語の代用字と中日同形語：例えば、濫用 (CN)/乱用 (JP)；予定 (CN)/予定 (JP)
- (3) 日本語の訓読語に由来する中日同形語：例えば、場合、立場、取締、取消、手続
- (4) 新しい日本語の借用語：定食、食材、素人

二、広義の中日同形語

- (5) 中国語の成語の簡略化によってできた広義の同形語：例えば、深謀、守株、望蜀
- (6) 中国語の四字熟語の改変によってできた広義の同形語：例えば、粉骨碎身（CN：粉身碎骨）、良妻賢母（CN：賢妻良母）¹³⁾
- (7) 中国語の連語が日本語の一語になってできた同形語：例えば、快走、丑妇、丑女
- (8) 中日逆順の同素語：例えば、介绍（CN）/紹介（JP）；习惯（CN）/慣習（JP）¹⁴⁾；命运（CN）/運命（JP）
- (9) 部分的に同形の構成素を持つ語彙：例えば、守財奴（CN）/守銭奴（JP）；当事人（CN）/当事者（JP）
- (10) 中日間に関連性のない同形語

上記のうち、(4)と(10)は東アジア共通国際語とは関連がないため、本稿では問題とせず、残りの8項目について検討する。

(1)は中国語の繁簡字と日本語の新旧字体の対応問題である。これは上記の10項目の中で唯一「字」のレベルの問題であり、『康熙字典』への回帰によって解決策を見出すことができる。(2)は戦後日本における漢字の制限に起因する問題であり、一部の複合語に限られる。代用字によって生じた語については、(9)でもう一度取り上げる。(3)は20世紀初頭に法律用語として中国語に導入され、次第に一般語彙となったもので、数は少ない。

広義の中日同形語のうち、(5)と(6)は日本語における中国語語句の使用上の変形と見なすことができる。これらは主に中国語の成語や古典語に関連しており、科学叙述を目的とする東アジア共通国際語とは接点が多くない。施建軍は(7)で3つの語を例に挙げているが、中国語の二字語の多くは外国語（英語、日本語）との接触によって1語として強固に凝縮されたケースが多い。具体的な検討は3.3節で行う。(8)の中日同構成素の逆順の語は常に注目を集める現象であるが、筆者は、検討の対象は、並列構造の語に限定すべきだと考えている。並列構造の新語は、同じか近似した意味を持つ構成素で作られたもので、その動機付けは、新しい概念の導入ではなく、口頭による表現のためである¹⁵⁾。並列構造の語では、構成素が同義であるので、造出された当初は、配列順序が自由に変動するものが多い。その後、順序が固定されたが、日本語と中国語では異なる形に落ち着いた語がある。したがって、同素逆順の語に関しては、語の発生と伝播、定着過程の究明に重点を置くべきである。(9)は、複合語の中で一部の構成素のみが同形である場合を指す。施建軍が挙げた例には以下のようなものがある。

鸵鸟（CN）/駝鳥（JP）、珍珠（CN）/真珠（JP）、恫吓（CN）/恫喝（JP）

しかし、以下のタイプの例がもっと多いようである。

中国語：电视、房间、书包、医生、坏处、报纸、假期、图片、校园、飞机、机场
日本語：時点、適切、示唆、発足、相違、連携、欠陥、書物、急激、開催、優位

上記の語において、構成素としての漢字は理解しやすいものと思われるが、複合語として他言語の使用者に理解可能であるかは問題である。代用字で作られた語についてもここで考察することが可能である。例えば、「缺陷→欠陥」のようなケースである。問題となるのは、不一致の構成素が言語間の理解にどのような影響を与えるかである。不一致の要素間に「同訓」の関係が存在する場合、複合語の理解は可能であるのか。構成素としての漢字は語の意味理解の基礎であり、特定の漢字が造語要素として成立する過程は日本語近代語彙史研究において重要な課題である。日本の学者たちはこの問題について研究成果を発表しているが、未解決の問題が多い¹⁶⁾。

施建軍や過去の研究では、中日間の近代以降の「借用関係」が同形語の確認において重要な基準となりうるると一貫して述べられている。筆者も、膨大な数にのぼる同形語は、中には偶然の一致によってできた語がある可能性も排除できないものの、主に近代における日中語彙交流の結果であると指摘している¹⁷⁾。

ある語が中日同形語かどうかを判断する際、一般的な国語辞典における収録の有無は重要な基準になりうるが、中日双方の辞典に収録されている語だけを同形語とすれば、一部の語が除外される可能性がある。合成語を収録する辞典は漢字のみを収録する字書ほど効果的ではないことを認識する必要がある。なぜなら、新しい合成語が日々作られつつあるので、刊行された辞典は合成語の収録において常に後追いの状態だからである。筆者は、「静的同形語」と「動的同形語」という分類の採用を提案する。静的同形語はすでに文字メディアに使用された、または辞典に収録された同形語であり、動的同形語は消滅した語や将来同形語になり得る語彙単位も含む。例えば、西周が『明六雑誌』で発表した「知説一」(1874.8.7)において使用された以下の語は、130年後に出版された校注本では注釈が施されている¹⁸⁾。

畢生 城堡 假冒 摻在 積累 旺衰 既往 鴻鵠

現代の読者はこれらの語を理解できないためである。日本語では1890年代以降に古語の淘汰と新語の導入という大規模な語彙交替が発生し、造語成分(語基)の新旧の入れ替えもこれと歩調を合わせた。今日の日本人の漢字理解は、新しい造語成分によって規定されている。したがって、動的同形語に関する研究にとっては、造語成分としての漢字の共時的な状況を詳細に把握することが前提条件となるであろう。また新たな同形語の候補については、接辞による新語が大きなウエートを占めるとと思われる。例えば、3字語形式は日本語では活発な造語パターンであるが、下記のAグループでは、下線の接辞成分は日本語では強い造語力を有するのに対し、

中国語では括弧内の語のように一部だけ使用可能である。B グループの接辞成分は現時点では中国語において殆ど造語力がない。但し、下記の接辞成分は将来的に日本語と同等の造語力を持つようになることも十分に考えられるであろう。いわば潜在的な同形語である。

- A 大歓迎、大恋愛（大革命、大批判……）
銀行員、会社員（研究員、公務員……）
住宅街、温泉街、官庁街（商店街……）
安心感、不安感（存在感、満足感……）
研究者、技術者、科学者、編集者（労働者……）
満足度、完成度、理解度、信用度（自由度……）
現実味、人間味、真実味（人情味……）
時間帯、気候帯、価格帯（火山帯……）
首都圏、支配圏、英語圏（北極圏、大気圏……）
実物大、一口大、等身大（碗口大……）
- B 情報源、発生源、資金源、収入源、供給源
解決策、対応策、防止策、改善策、支援策
疑問視、問題視、重要視、白眼視、特別視
男女別、種類別、地区別、産業別、年代別
健康面、安全面、精神面、経済面、政治面

同形語の確認におけるもう1つの作業は、特定の二言語間での語彙数の把握である。例えば、「国際中国語教育中国語水準等級基準」（2021年）の11092語の中で、日本の学習者にとって3700を超える同形語が存在する。施建軍は、日本の「毎日新聞」と中国の「光明日報」から約12700の同形語を選出しているが¹⁹⁾、筆者は、中日相互作用語（借形、借義、活性化の3パターンを含む）として、7700語の同形語をリストアップしている²⁰⁾。筆者の同形語リストは、古典語や俗語などを除外しており、より東アジア共通国際語に近いものと思われる。以上は中日間の同形語の状況であるが、日本語、韓国語、ベトナム語の観点から見れば、同形語の数はどのようになっているか。つまり、中⇔日韓越、日⇔中韓越、韓⇔中日越、越⇔中日韓の現状を調査し、最大公約数を見つけ出す必要がある。この基礎の上で、東アジア共通国際語を考察しなければならない。

また、韓国語とベトナム語はすでに漢字を使用していないため、同形語の問題はより複雑である。それぞれの字音語に対応する漢字を確定できるよう復元の語彙リストが作成できないのか。筆者は、これは非常に有意義な作業と考えている。

3.2 定性研究：東アジア共通国際語の語彙体系における位置

定性とは、東アジア共通国際語の性質を解明することである。前節では、東アジア共通国際語の意味的、形式的特徴について述べたが、この節では、東アジア共通国際語の現代語彙体系における位置づけや既存の語彙との関係について考察したい。この節の議論を通じて、東アジア共通国際語の現代性とその獲得に関してより深い理解が得られるであろう。東アジア四言語の語彙体系は近代以降大きく変化した。新語の大量増加がその具体的な現れである。新語は時代の変化によって生じた新概念、新事物に対応するものもあれば、ただ単に言語の形式上の要請に応えるものもある。新語における内容と形式の関係は、次の通りである。

	新義	旧義
新語形	神経、哲学、概念、電話	優秀、正確；考慮、調査
旧語形	経済、社会、影響、関係	学校、問題；優美；解決

旧語形+旧義の語（網掛け部分）の存在は不思議に思われるかもしれないが、これらの語は著しい使用頻度の増加があり、周辺語から中心語（基本語）になったものである。

同義語群の発達には語彙体系の近代化のもう1つの特徴である。同義語の増加は、教育の普及に連動する動きと言える。書面語に関する言語能力の獲得とその使用はごく僅かな一部の人々から解放され、誰もが書面語の読者と作者になりうる。画一的な表現を避けるため、人々は言語表現の多様性を今まで以上に追求するようになった。同義語の増加により、「一物多名」の状況が形成された²¹⁾。同一の概念カテゴリに複数のメンバーが存在する場合、プロトタイプ化が必然的に誘発される。具体的には、ある語がカテゴリの中心に移動し、他の語が周辺に追いやられる。西周や福沢諭吉など明治時代の人々が頻繁に使用した語には、時が経つにつれて衰退したものもあれば、難解な専門語から一般語に変わり、高頻度語（流行語）になったものもある。この現象に最初に注目したのは、田中牧朗である。田中は国立国語研究所のコーパスを利用して、雑誌『太陽』における「優秀」という語の定着とその同義語群の形成（氏は「〈優秀〉語彙」と言う）について考察した。田中によれば、雑誌『太陽』に使用された優秀の意味を表す語に「すぐれる、卓越、卓絶、絶倫、抜群、卓抜、優秀、ひいでる」などがあり、その使用頻度の変化を調査すれば、「当初は、「すぐれる」のみが多用されていたが、やがて「優秀」がこれに加わり、この二語が〈優秀〉語彙の基本部分を構成するようになり、他の語は周辺的な語としての位置にとどまった」とし、「漢語「優秀」は、和語「すぐれる」との間に意味的な使い分けの関係をもったことで、語彙の基本的な部分に深く浸透し、「他の語は、語彙の基本的な部分に深く入り込むものではなかった」とのことであった²²⁾。つまり「すぐれる」は元々使用頻度が高かったが、「優秀」は他の語を押し退け、急速に「すぐれる」と肩を並べるようになった。これは同義語の間の「競合」現象である。「優秀」は競合に勝ったのである²³⁾。田中は、

雑誌『太陽』において、「優秀」のような事例が多数存在するとし、この現象を「基本語彙化」と呼んでいる。

雑誌『太陽』等の言語資料に見られる基本語彙化は、同義語群の拡大によって引き起こされた現象である。日本語の基本語彙化の結果は、英和辞典や国語辞典によって固定され、また英和辞典を通じて、中国、韓国、ベトナムにも波及した。例えば、『新訳英和辞典』（1902）、『新訳英和双解辞典』（1908）、『模範英和辞典』（1911）はいずれもいち早く中国に持ち込まれ、『英華大辞典』（1908）や『辞源』（1915）に訳語を提供した²⁴⁾。

上述した基本語彙化の結果は、東アジア共通国際語の中核をなしていると思われる。東アジア四言語において、それぞれの語の基本度がどのようなものか、同一概念カテゴリの他の語とどのような関係にあるかを明らかにするのは、定性研究の主要な内容である。

3.3 語源研究：東アジア共通国際語の生成・交流史

語源研究とは、東アジア共通国際語の発生と伝播の歴史を考究することである。今までの研究成果によれば、東アジア共通国際語は主に以下の文献群において発生した。

1. 中国の典籍、仏教経典、宋明時代の白話小説、善書など
2. 来華した宣教師による漢訳洋書と英華字典
3. 日本の江戸時代の蘭学書、明治以降の翻訳書と関連する著述
4. 英和辞典、専門用語集、国語辞典などの辞書類
5. 日本の学校教科書

以上の各項目に関連する文献の詳細については、拙著『新語往還』を参照されたい²⁵⁾。

由来と同様に重要なのは、東アジア共通国際語の生成メカニズムの究明である。つまり新語がなぜ必要とされ、どのように創造され、東アジアに広がったのかなどの疑問である。田中の一連の研究では、語源に言及することはなかった。語源の問題を疎かにできないのは、すでに「優れる」などの語が存在する中で、なぜ新たに同義語「優秀」を造出しなければならないのかという問いに答えなければならないからである²⁶⁾。さまざまな事実から、東アジア諸言語——韓国語やベトナム語における具体的な状況は確認が必要だが、——日中両言語において、語彙体系の近代化プロセスに「二字語原則」が貫かれていることが示唆されている。それは、日本語では「和漢共通二字語原則」、中国語では「単複共通二字語原則」として具現されている。即ち、

- 日本語の総原則：和漢共通。細則 1. 新概念は二字漢語で表現（或いは訳出）する。2. 既存の固有語（和語）や漢字一字語には、同じ意味の漢字二字語をあてがう（複数の語を用意

するのが一般的である)。

- 中国語の総原則：単複共通。細則 1. 新概念は二字語で表現 (或いは訳出) する。2. 既存の一字語には、同じ意味の二字語を新たに用意する (複数の語を用意するのが一般的である)。

現代語彙が漢字二字語にこだわる理由は、二字語に以下の利点があるためであろう。

1. 語形は固定長で概念に対応する
2. 二字語は述賓、定中、状中、動補などの構造を持ち、概念を精密に描写することができる
3. 二字語は並列構造を採用することができ、語義 (通常は概念義) を変えずに、口頭による表現とヒアリングによる理解を可能にする (言文一致)

上記の3点はすべて、科学叙述からの要請である。つまり、精密な描写と同時に、言語の有声化も求められるのである。

語彙レベルから見れば、近代語のもっとも顕著な変化は、語彙の二字語化と言えよう。しかし日本語と違って、中国語の二字語化は果てしない長い道のりであった。王力は早くも1943年に「数千年にわたり、中国語は複音化する傾向があるが、複音語は結局それほど多くはなかった」と指摘している。王力はさらに次のように述べている²⁷⁾。

(西洋の概念を中国語に翻訳する時) 迂言法 (periphrasis) がよく用いられる。これは、つまり西洋の一単語を中国語の連語 (フレーズ) に訳すもので、例えば以下の通りである。

animal 動物	circumstance 環境	spring 発条 (弾簧)	instinct 本能
truth 真理	piano 鋼琴	instrument 工具	absolute 絶対
relative 相對	international 國際	whole 全体	improve 改善 (改良)
realize 實現	appreciate 欣賞	mobilize 動員	bless 祝福

このような (対訳関係によって) 連語が、実際には1単語となったのである。なぜなら、このような訳語を使用する人の頭の中には往々にして西洋語の影が存在するからである。

王力は、「中国人の中で英語を理解する人がフランス語やドイツ語、イタリア語、スペイン語など他の言語を理解する人よりも遙かに多いため、言語の欧化とは大まかに言えば英語化である」とも指摘している。但し日本語からの影響について、王力は「上述の訳語について、日本の訳名と中国自身の訳名を区別していない。なぜなら、大まかに言えば、日本も漢字を利用している (少なくとも、中国が採用した日本の訳語は漢字を使用している) し、ほとんどが迂言法を使用しており、中国の訳語創出法と大きな相違はない」と述べている。しかし、訳語創造において日中では「大きな相違はない」という王力の見解には議論の余地があるであろう。確

かに19世紀の英華字典には one word に対する二字語の例が多くあるが、しかし例えば、

animal 畜生、truth 信徳（モリソン English and Chinese Dictionary, 1822）

instinct 本性、truth 真理（メドハースト English and Chinese Dictionary, 1847-1848）

circumstance 境遇（ロブシャイド『英華字典』1866-1869）

のような訳語は現在の一般的な訳語と異なる。王力があげた例語の殆どは日本語から来ている。日本語は漢字二字を1語として固定させる特徴があるので、英華字典において完全に1語として凝縮していないものも、日本語の翻訳書、英和辞典において強固な1語となったものは少なくない。例えば、「述語+目的語」構造や「動詞+補語」構造は中国語では容易に1語となりにくい。しかし、「動員、出版、拡大、打開」などは日本語式の固定化の影響を受けて、東アジア共通国際語になった²⁸⁾。つまり、王力が英語を挙例しているが、東アジア共通国際語の成立過程において日本語が果たした役割は無視できないのである。

このように、英語や日本語の干渉作用と基本語彙化の選別は、東アジア共通国際語の形成の主な動因であり、漢字語の二文字化は外部要因の強力な推進によって実現されたと言える。

東アジア共通国際語の生成メカニズムを理解することは、正確な語源探求に役立つ。個別の語源研究には、初見の文献証拠の確認、出典テキスト、造語者の造語理由、普及、定型化などの内容が含まれる。東アジア共通国際語を近代語彙として議論する際には、東アジア域内での普及と定型化などが主要な検討内容となる。東アジア共通国際語の語源の探求は、「史」の観点から東アジア共通国際語が生成から共有へと至る歴史のプロセスを研究することであり、その研究成果は東アジアにおける「近代」を冠されるすべての研究に寄与することになる。

3.4 類義分析：東アジア共通国際語の変容

東アジア共通国際語は「同」を主としているが、各言語環境での長期的な使用により独自の「変容」が生じる。同一の言語はいくつかの方言に分かれ、さらに多数の変種を生じることは言語の常態と言えよう。借用によって言語間を移動する語彙が移動先で変容することはなおさら避けられない。一方、東アジア共通国際語の生成の歴史は、近代的概念の獲得と科学叙事が成立するプロセスである。近代以降、人、物、知識の移動は日増しに盛んになり、異なる国家、社会体制、地域文化の人々が交流するための言語的基盤が必要になってくる。しかし、「言語相対論」が主張するように異なる言語は異なる方法で外部世界を区切る。言語の本質は、変容、つまり多様性の実現と考えられる。東アジア共通国際語を例にあげれば、「教室 = classroom」は東アジア四言語で意味は高度に一致しているが、日本語では「教室」にはさらに以下のような派生的意味がある。

1. 大学などの教研室、例えば解剖教室、教室代表
2. 趣味や文化活動の施設や場所、例えば料理教室、文化教室

東アジア共通国際語の特定言語における変容は、しばしばその伝播経路を反映している。例えば、次のように「殺害」という語は、中国語やベトナム語ではマイナスのニュアンスがあるが、日本語や韓国語ではそのような制限がない²⁹⁾。

? 特種部隊殺害了恐怖分子。(特殊部隊はテロリストを殺害した。)

○恐怖分子殺害了无辜平民。(テロリストは罪のない一般民衆を殺害した。)

「殺害」は中国語古典に文字列として見られるが、使用頻度の上昇は19世紀末から20世紀初めにかけてである。日本語メディアと中国語メディアの使用はそれぞれ韓国語やベトナム語に影響を与えたと考えられる。意味分析には意義素分析法がよく用いられる。つまり、一連の意味素の有無に基づいて語の意味を記述する。例えば、「父親」「母親」の違いは、「男性」という意味素の有無による。しかし、意義素分析法は名詞には有効であるが、概念的意味が同じで、周辺の意味が異なる語には無力の場合が多い。例えば、「改良」「改善」、「優秀」「優美」などの意味素分析では、一連の語の違いを明示するのは難しい。既存の研究は主に評価や文体などの相違に焦点を当てている。東アジア共通国際語については、単に語自体に限らず、語彙の使用域 (register)、慣用句 (idiom) や単語同士の組合せ (collocation) にも注意を払う必要がある。語を超えた単位でのみ、概念義が同じで周辺義が異なる語群の相違を把握することができる。同一の概念カテゴリーに複数の同義語の存在は必然的に競争を引き起こし、最終的にはそれぞれの縄張りが確定する動的なバランスが形成される。

上記の四項目は、研究内容として相互に関連している。定量は基本的な作業であり、全体を把握することである。定性、溯源は東アジア言語の近代化研究の主要な内容であり、漢字の継承と革新を考える手がかりを提供する。類義分析の研究成果は、東アジア四言語を対象とした外国語教育の効率向上に役立つだけでなく、母国語教育にも有益な示唆を与えることになる。

4. 結び：漢字の栄光と未来

梁啓超は「今日の世界の学術は、十中八九が前代にはないものであり、その思想を表す専門用語もまた、前代の人々が決して夢にも見なかったものである」と述べている³⁰⁾。これは語彙の内容面を言っている言説である。一方、文学革命の提唱者である陳独秀は1920年の武漢での演説で、「白話文と古文の違いは、名詞が理解しやすいかしくいかではなく、名詞及びその他のすべての語が『現代的なもの』か『非現代的なもの』かに関わっている」と指摘している³¹⁾。

現代的とは何かを明言していないが、内容面だけではないことは明らかである。私たちは語の形式上の変化、つまり動詞や形容詞を含む二語化の問題にも注意を払う必要がある。これまでの語彙研究では、東アジア文明共同体の語彙の基盤について必ずしも明確な認識を持っていなかった。20世紀80年代から、中国と日本の学者は語彙交流の視点から学術用語の語源研究を進め、大きな成果を上げている。同時に、中日韓越の四言語を対象とする東アジア外国語教育の専門家も、各言語における同形語の相違に多大な関心を寄せている。但し、通時的研究と共時的研究は互いに独立して進められ、関連性は希薄である。一方、思想史学者の汪暉は、その著『現代中国思想的興起』で「科学言語共同体」に関する章を設け、言語と近代思想形成の関連について論じている³²⁾。しかし、その議論は中国に限られ、主に科学者集団を対象としており、言語共同体の基盤となる語彙には触れておらず、東アジア全体への配慮も不足している。以上のような状況を踏まえ、東アジア共通国際語の位置づけを吟味し、近代知識の受容及び地域研究の観点から考察する必要性を痛感している。

東アジアの文化文明は漢字をその表出手段としている。近代以降の漢文脱却、漢字廃止の主張と実践は必ずしも漢字の地位を揺るがさなかった。それどころか、西洋の科学知識を受け入れる上で、漢字が決定的な役割を果たしている。グローバル化が進められる昨今、漢字は東アジアと西洋をつなぐ絆であるのか、それとも障害であるのか、これは語彙研究者が自分なりの答えを出すべき問いである。

注

- 1) 子安宣邦著『漢字論：不可避の他者』、岩波書店、2003年。
- 2) ここで言う「用意」には、新造、改造、活性化が含まれている。漢籍語の改造と活性化の問題について、沈国威編著『漢語近代二語研究：語言接触與漢語的近代演化』（上海：華東師範大学出版社、2019年）第5章参照。
- 3) 「科学叙述」とは、教育現場において科学の知識を内容とする言語活動を言う。内容と形式の両方から規定する必要がある。沈国威「言文一致の語彙的基盤について——日中の場合」（『中国文学会紀要』42号、2021年、第1-28頁）参照。
- 4) 王力著『漢語史稿』、北京：中華書局、1980年、第528頁。
- 5) 安田敏朗著『「国語」の近代史：帝国日本と国語学者たち』、東京：中公新書、2006年。
- 6) 以上の内容に関しては、『学習言語とは何か：教科学習に必要な言語能力』（バトラー後藤裕子著、三省堂、2011年）；『言語マイノリティを支える教育』（中島和子訳著、慶應義塾大学出版会、2011年）を参照。
- 7) 『世界の名著36 コント スペンサー』（清水禮子訳）、中央公論社、1970年、第410-411頁。彭春玲著『章太炎訳＜斯賓塞文集＞研究、重訳及校注』（上海人民出版社、2021年、第198、202頁）も参照。
- 8) <https://www.wgtn.ac.nz/lals/resources/academicwordlist> 参照。最終アクセスは、2023年3月10日。

- 9) 沈国威編著『近代英華英辭典解題』、大阪：関西大学出版部、2011年。
- 10) 沈国威著『語彙力の獲得』、大阪：関西大学出版部、2023年。
- 11) 韓国語、ベトナム語はすでに漢字を使用していないため、同形語の認定に関しては、日中間で議論されることが多いが、韓越両言語における字音語の復元も解決しなければならない課題であろう。
- 12) 施建軍著『中日現代語言同形詞彙研究』、北京大学出版社、2019年、第26-41頁。
- 13) 「粉骨碎身」と「守銭奴」は中国の典籍にも見られるので、改変の例としては不適切である。「良妻賢母」「賢妻良母」については、両方とも明治後期の女性雑誌に登場する表現であるが、後に「良妻賢母」が徐々に優勢となった。したがってこちらも改変の例になり得ない。田野村忠温教授のご指摘に感謝する。
- 14) 日本語には「習慣」「慣習」という逆順の語が実在しているが、「習慣」は個人の習性を指し、「慣習」は社会的な習わしを意味する。
- 15) 漢字語は、1字単位では口頭表現に使えないものが多く、聞いても分からないので、2文字に形式を拡大しなければならない。
- 16) 高野繁男著『近代漢語の研究—日本語の造語法・訳語法』、東京：明治書院、2004年；荒川清秀著『日中漢語の生成と交流・受容—漢語語基の意味と造語力』、東京：白帝社、2018年。日本の研究では、漢字の造語成分を「漢字語基」と呼ぶ場合が多い。
- 17) 沈国威著『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容』(東京：笠間書院、1994年)第1章参照。
- 18) 『明六雑誌』、東京：岩波書店校注版、山室信一・中野目徹校注、2009年。校注者は、「假冒」を正しく理解していないようである。
- 19) 施建軍著『中日現代語言同形詞彙研究』、2019年。
- 20) 沈国威編著『漢語近代二字詞研究』、2019年。
- 21) 一方、科学的な文脈では、術語の単義性が求められる。「一物一名」の要請も強くなる。現代語の語彙体系は、その両方の力作用により再構築される。沈国威著『漢語近代二字詞研究』、2019年第4章参照。
- 22) 田中牧郎、「漢語「優秀」の定着と語彙形成—主体を表す語の分析を通して」、『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究』国立国語研究所報告122、2005年、第115-141頁。
- 23) 但し田中は触れていないが、「優秀」がカテゴリーの中心に移動する際、漢籍語「優美」と激しく争った。「優秀」が優勢を確立したのが、雑誌『太陽』では、1909年以降である。沈国威著『語彙力の獲得』、第115頁。
- 24) 『新訳英和辞典』(1902)と『新訳英和双解辞典』(1908)はすぐ次のように中国語版が作られ、広く販売された。『新訳英漢辞典』(陳家瑞編、群益書社、1910年)、『新訳双解英漢辞典』(陳家瑞編、群益書社、1912年)。
- 25) 沈国威著『新語往還—中日近代語言交渉史』、北京：社会科学文献出版社、2020年、第3章。
- 26) 「優秀」の語源について、周菁菁「二形容詞“優秀”の成立—基于語言交渉視角的考察」(『中国語研究』60号、2018年、第104-119頁)参照。
- 27) 以下の引用は、王力著『漢語語法理論』(1943)、收『王力全集』第1巻、山東教育出版社、1984年、433-442頁。
- 28) 沈国威編著『漢語近代二字詞研究』、2019年。陳力衛著『東来東往』、北京：社会科学文献出版社、2018年。
- 29) 『大辭林』に「人を殺すこと。盗賊に殺害された」とある。『現代漢語規範詞典』には「非法殺死。殺害无辜」と解釈されている。

- 30) 梁啓超が章士釗『論翻譯名義』に書いた序文、『国風報』、1910年11月22日。
- 31) 陳独秀「我們為甚么要做白話文？」、『晨报』、1920年2月12日。
- 32) 汪暉著『現代中国思想的興起』下巻、三聯書店、2015年。「科学話語共同体和新文化運動的形成」、『學術月刊』、2005年(7)、第104-113頁も参照。

付記：本稿は日本學術振興会科学研究費補助金、基盤研究C「日中における言文一致の語彙的基盤に関する研究」（2022年度～2024年度、研究代表者：沈国威）の研究成果の一部である。

